

D.G. Rossettiの最後の詩作 —バラッド詩の個性と非個性—

宮原牧子



Dante Gabriel Rossetti (1828-82)がPercy編纂によるバラッド集、*Reliques of Ancient English Poetry* (1765)を15歳にして既に読んでいたことは、彼の書簡により明らかである。¹ 彼が伝承バラッドによく通じ、それらを基に多くのバラッド詩を書き残し、そしてその内“Sister Helen”に代表されるいくつかの作品において、その形式とテーマを巧みに用いたことは巷間に知られている。しかし口承されてきたものとは異なり、詩人である彼の表現には重層的に技巧が凝らされ、また登場人物たちの詳細な心理描写が加えられた。そしてそこに描かれた心理とは、詩人の心情と深く関わるものであった。彼のバラッド詩は、元来伝承バラッドが持っていた「非個性」²という特性を著しく失ったと言える。ロセッティの作品はしばしば「個人的なもの」として非難されており、彼自身晩年までそのことに対し過敏であったにも拘らず³、その姿勢を崩すことはなかった。そして彼は作品に織り込まれた彼自身の隠しきれない心情の激しさを、表面に施された極めて精緻な技巧、伝承バラッドに借りた形式美によって、巧みに偽装した。そしてバラッドという形式は晩年のロセッティにとって、あるいは命綱であったかも知れないのである。

晩年のロセッティがその華やかな青年時代と異なり、なんと孤独で陰惨な生活を送っていたことか。その事実は彼の書簡から、また彼のごく身近な友人による伝記から切々と我々に伝わってくる。「死」は若い頃から彼に付き纏う関心事、そしてしばしば作品のテーマであった。しかし1872年、Buchananによる“The Fleshly School of Poetry”が上梓された年に彼は自殺を図り、またその数年後には不眠症と腕の不自由と、それを紛らわせるべく常用し始めたクローラルの為に、「死」は彼にとって現実のものとして感じられるようになったことだろう。クローラルは妻の死因となった薬でもある。1876年には、彼の亡骸をHighgateに眠る妻の元には葬らぬこと、Jane Morrisからの手紙は全て焼却することな

¹ O. Doughty and J. R. Wahl, eds., *Letters of Dante Gabriel Rossetti*, 4 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1967), I, 10.

² 山中光義 『バラッド鑑賞』 (東京：開文社, 1988年), VIIページ参照。

³ O. Doughty and J. R. Wahl, *op. cit.*, IV, 1896.

どを、遺言として友人George Gordon Hake に託している。⁴ この転機があつて彼は“The White Ship”の諦観に達する。White Ship と呼ばれる船が難破したという12世紀の史実を基に、自然や神の偉大なる力の下の人間存在の卑小さを詠い、この事故により命を落とした英国王Henry I世の息子Williamの姿に準えて自らの若き日の奢りを詠ったこのバラッド詩を1880年5月に書き終えた彼が、その年の9月Janeに宛てて書き送ったのは、“everyone’s history seems barren of results as far as I know it.”⁵ という、人の一生の虚無を受け入れる言葉であつた。この作品を書くにあたり、彼は実在の人物であるヘンリーI世についての詳細な調査を行なっており、⁶ 初めて作品の題材となる人物の歴史的背景に興味を示したのであるが、その結果この言葉が彼の口をついて出たのである。しかしながら、同じく史実を基にしたバラッド詩“The King’s Tragedy”を書き終えた1881年に彼が書簡に残した言葉は興味深いものである。“The King’s Tragedy”は死を決したJames I世の“farewell” (st. 113)⁷ という言葉に象徴されるように、その登場人物に自らを準えたロセッティの人生への別れの詩であつたと言える。“The White Ship”と同じくこの作品においても人間の存在の儚さは繰り返し詠われるが、謀反の手に掛かつて命を落とした王を想い女王は、“Alas for the woful thing, / That a poet true and a friend of man, / In desperate days of bale and ban, / Should needs be born a King!” (st. 180)と嘆く。しかし語り手Catherine Douglasが傷付きながらも見たものは、王の「人間として」の立派な最期であつた。⁸ 次に引用するのは、ロセッティがこの“The King’s Tragedy”を仕上げる直前にW. Daviesに送った書簡の一部である。

It is true enough that my own life is a very uncheered one. Yet I shall not sink. I trust, so long as the poetic life wells up in me at intervals (and with me it was always and by preference intermittent) and so long as my painting still interests me and still staves off the horror (against which I am not proof) of inability to meet indebtedness. . . . I have written two historical ballads [“The White Ship” and “The King’s Tragedy”] which will certainly find a much wider field of appreciation than anything I have yet done. Even if I did not paint, I

⁴ *Ibid.*, III, 1437-8.

⁵ *Ibid.*, IV, 1809.

⁶ *Ibid.*, IV, 1751.

⁷ From *The Collected Works of Dante Gabriel Rossetti*, 2 vols. (London: Ellis and Elvey, 1890). 以下、“Jan Van Hunks”および“The Question”以外の作品からの引用については全てこの版に依る。

⁸ “Half naked he stood, but stood as one

Who yet could do and dare:

With the crown, the King was stript away, —

The Knight was ’reft of his battle-array, —

But still the Man was there.” (“The King’s Tragedy”, st. 146.)

should never be a redundant poet. To write as much as one can write leads either to meandering narrative, empty declamation, or mere jagged jargon.⁹

明言されてはいないが、ロセッティにとってこの二つのバラッド詩は重要な意味を持っていた。彼はこれより数年前、自身の絵画作品が時代後れになりつつあったことを自覚し、詩人であり芸術家である友人W. B. Scott (1811-90)に“Your sorrows in connection with that infernal word ‘quaint’ recall my own.”¹⁰と書き送っていたのであるが、しかしこの時点において彼は詩人として、画家として生きることには自信を取り戻したようである。彼はこれら二作品を書くにあたり、バラッド形式と実在人物の題材を扱う者として、個人的な感情を殺すという原則に従ってみせながら、大胆に、しかもその個人的感情の表出故にあれ程非難されたソネットを上回る率直さで心情を吐露している。躊躇いを振り切ったことで彼は罪悪感から逃れ、新たな詩人の自負を得たのではなかっただろうか。たとえそれが薬物作用による単なる幻影であったとしても。

ところがこの数ヶ月後、彼の健康状態と精神状態が悪化し、書簡に友人達の疎遠を嘆き、寂寥を訴える言葉を羅列した時、再び得たはずのこの自信を彼が果たして自らの前に掲げ続けることができたとは思われない。ここで取り上げる“Jan Van Hunks”は、そのような状態にあったロセッティが亡くなる1ヵ月程前に仕上げた作品である。一読するところ作者自身とは何の関わりも持たない怪奇物語ではあるが、その実この作品もまた先に挙げた“The White Ship”や“The King’s Tragedy”と同じく作者ロセッティの姿、心情を大いに映したバラッド詩である。まさしく“Jan Van Hunks”はロセッティの自己戯画なのである。この作品の数連しか現存しない初作を知る Florence Saunders Boosをして“Surprisingly, “Jan Van Hunks” is a good poem; what in the serious ballads seems unconscious self-parody is here intentional”¹¹と言わしめている。しかし別の個所に“Rossetti enjoys the cheerful totality of Van Hunks’ misanthropy.”¹²とあるように、“self-parody”という言葉はここでは滑稽な風刺以上のものとしては捉えられていない。

小論ではこの“Jan Van Hunks”に、むしろ自虐的な詩人の姿を見出し、作品の表面の「非個性」とその裏面の「個性」の相剋について考察してみたい。

ロセッティは友人Watts-Duntonに宛てて1882年3月後半、“Jan Van Hunks”を仕上げたので是非読んでほしいとの書簡を送っている。そして彼の死後、弟William Michael

⁹ O. Doughty and J. R. Wahl, *op. cit.*, IV. 1857.

¹⁰ *Ibid.*, III, 963.

¹¹ Florence Saunders Boos, *The Poetry of Dante Gabriel Rossetti* (Hague: Mouton & Co. B. V., Publishers, 1976), p. 188.

¹² *Ibid.*, p. 189.

Rossetti (1829-1919) は、多くの研究者たちが自明のことと見た兄ゲイブリエルの精神障害を否定するかのように、次のように書き残している。

[H]e [Watts-Dunton] supposed Rossetti was getting on with *The Dutchman's Pipe*. This indicates that Rossetti was still active with mind and pen up to almost the last twilight of his life; for the letter was written only twenty-four days before the date of his death, 9th April.¹³

ロセッティが初めてこの作品を書いたのは1847年頃のことである。¹⁴ 当初の題は“The Dutchman's Pipe”であったが、ロセッティの作品らしからぬ題名であるとウィリアム・マイケルが指摘するように、¹⁵ 彼自身相応しくないと感じてか、再び筆が加えられた時“Jan Van Hunks”となった。ウィリアム・マイケルは当時を振り返り、次のように続ける。

[M]y brother wrote that great majority of a ballad, of a grotesque character not unmingled with horror, about a smoking Dutchman and the devil, founded upon a prose story which he and I had read some years before in a periodical named *Tales of Chivalry*, and in his last illness he recurred to and completed this ballad.¹⁶

*Tales of Chivalry*に収められた*Henkerwysse's Challenge*という物語に彼が初めて魅かれたのは十代の青年の怪奇趣味からであったのだろう。ロセッティが怪奇作品を好んだことは知られているが、彼のこのような作品についての知識はおもに少年時代に培われたものである。しかしそれだからこそ彼が人生最後の時この作品に手を加えた心情には並々ならぬものがある。ロセッティによってこのバラッド詩と彼の最後のソネットを託された親友ワッツ・ダントンは、これらを公にするか否かについて後に大いに悩まされることになったのであるが、¹⁷ 最終的に出版を決めた彼は*Old Familiar Faces*の中で、“Jan Van Hunks”を読めば“a new and . . . unexpected side of Rossetti's genius”¹⁸ が見出されることだろうと述べている。

オランダ人ジャン・ヴァン・ハンクスは、パイプの吸い比べ勝負、つまりどちらがより長くパイプを吸い続けることができるかという勝負には絶大なる自信を持っていた。もは

¹³ William Michael Rossetti, *Dante Gabriel Rossetti as Designer and Writer* (London, Paris, New York & Melbourne: Cassell & Company, Limited, 1889), p. 175.

¹⁴ *Loc. cit.*

¹⁵ *Loc. cit.*

¹⁶ *Loc. cit.*

¹⁷ Walter Theodore Watts-Dunton, *Old Familiar Faces* (London: Herberd Jenkins, 1916), pp. 98-102.

¹⁸ *Ibid.*, p. 102.

やこの世に彼に敵うものはなく、地獄からの挑戦でも受けて立とうと豪語した時、悪魔が現れる。彼はそうとは知らずに悪魔と勝負をし、当然のことながら負けて地獄に堕ち、そこで頭と手足を切り取られ、自らの姿を悪魔のパイプにされてしまう。この物語の展開は我々にFaustのそれを髣髴とさせるが、ヴァン・ハンクスはファウストのように死の直前“Augenblick”を讃えるようなことはない。飽く迄も惨めな死に様である。

FULL of smoke was the quaint old room
 And of pleasant winter heat,
 Whence you might hear the hall-door slap,
 And the wary shuffling of feet
 Which from the carpeted floor stepped out
 Into the ice-paved street. (st. 1)¹⁹

この奢り高ぶった男が居るのは、“the quaint old room”である。前出の書簡で彼が“infernal word”だと述べた“quaint”の言葉がヴァン・ハンクスを取り巻く。また二重母音や長母音を重ねた重い音韻は、この部屋の陰陰滅滅とした雰囲気強調している。この部屋は“pleasant winter heat”に満ちており、凍えるように冷たい冬の季節の中、この部屋だけが暖かなのである。そして彼はこの部屋の中から、氷に覆われた通りを歩く人々を嘲笑う。意外な語句の組み合わせ、“pleasant”, “heat”そして“winter”には、このような皮肉が込められている。その彼の顔は“an inward grin” (st. 4) に満ちていると表現される。部屋の内と外は富と貧、非情と有情の世界として対照的に描かれる。



“Van Hunks was laughing in his paunch” (st. 2) とは、ヴァン・ハンクスの嫌らしい表情も目に浮かぶ、実に不快感を催させる表現である。貪欲の象徴である脂肪の塊を腹の周りに波打たせて笑うこの男の姿に、かつてあれほど美しく若い男女ばかりを描いていたロセッティの美の世界は毫も見出せない。

Even as he laughed, the evening shades
 Rose stealthily and spread,
 Till the smoky clouds walled up the sun
 And hid his shining old head (st. 3)

生き物のごとく這い上がる“smoky clouds”に象徴される恐怖の予感に、苦笑させる滑稽さが混じり合う。太陽の“shining old head”に思い浮かべるのは、年老いた男の顔である。ワッツ・ダントンの指摘は物語の展開のみではなく、このような細部の表現に対してなき

¹⁹ From *The Ballad of Jan Van Hunks* (London: Printed for Private Circulation only. 1912), 以下, “Jan Van Hunks”からの引用は全てこの版に依る。

れたものであろう。

“For thirty years,” the Dutchman said
 “I have smoked both night and day;
 I’ve laid great wagers on my pipe
 But never had once to pay[.]” (st. 6)

「30年の間」と彼は言う。ロセッティがPre-Raphaelite Brotherhoodを結成してこの時既に30年が経っていた。“The White Ship”に、また“The King’s Tragedy”に作者ロセッティの姿を見たように、この“Jan Van Hunks”の主人公であるこの醜男に、我々はロセッティ自身の姿を見出すのである。そして“The White Ship”において、奢り高ぶった若者に死という報いを与えた彼が、このバラッド詩ではこの中年男に、より哀れな報いを与えようというのである。

ヴァン・ハンクスが“the smoking-crib of Hell!” (st. 7) からの挑戦者も受けて立とうと言った瞬間、一人の小柄な老人が現れる。老人は“a century’s sleep” (st. 8) からたった今目覚めたようだと言われるが、これは世紀末にあったロセッティの時代意識の表れと解釈できる。W. B. Yeatsが、時を得て身を起こしベツレヘムに迫り来る怪物を詩に描いたのはこの37年後であるが、そのイメージの一片がここに見える。また「世紀末」に纏わる退廃趣味を象徴する絵画芸術形態がその絶頂を迎えるにはこれより数年待たねばならなかったが、時代の嗜好に敏感であったロセッティが周りの芸術家たちの関心の移行に気付かないわけではなく、彼自身の興味も彼らと同じ方向に傾いていたであろうと考えられる。

悪魔はヴァン・ハンクスを友と呼び、深々と頭を下げながら賭を申し出る。賭けられたのは、勝者の命令に絶対に従うという約束であった。ヴァン・ハンクスは“your home, / I’d reach be it far or near” (st. 15) と言って安請け合いするが、彼は相手が悪魔であることを知らない。自信に満ちた彼の“far and near”という言葉は、特にこの後の展開に対する鋭い皮肉となっている。火皿に煙草を詰められ賭が始まる。彼らのパイプから立ち上る煙は、“mesh of some secret thing” (st. 16) のように彼らを取り巻くが、悪魔の登場の時にも彼は“something lurked about him [the little old man]” (st. 9) と感じただけであった。人間には知覚できない危機がある。“The King’s Tragedy”においても、王の未来を予言する老婆にただならぬ妖気を感じ取ったのは馬のみであった。煙の網中に取り込まれたヴァン・ハンクスにもはや逃れる術はない。

強風が建物を揺るがす。悪魔は、

“If aught this night could be devised
 To sweeten our glorious smoke,
 ’Twere the thought of outcast loons who freeze
 ’Neath the winter’s bitter yoke.” (st. 17)

と言うが、悪魔がそう言わずともヴァン・ハンクスは、通りで凍える人々を嘲笑った (st. 4)。たとえその中に家族がいたとしてもである。4行目の“winter’s bitter yoke”は、“pleasant winter heat” (st. 1)と対照を成す表現でもある。

扉を怖々と叩く音がして、彼の家族が次々とやって来る。先ず、かつてヴァン・ハンクスの勧める金持ちの娘を断り貧しい娘を娶った息子が、妻と赤ん坊のためにパンを恵んでくれと父親に懇願する。

Van Hunks looked after the feathered smoke: —
 “What thing so slight and vain
 As pride whose plume is torn in the wind
 And joy’s rash flight to pain?” (st. 21)

パイプの吸い比べ勝負を続けながら彼はこう答えるが、“pride”や“joy’s rash flight to pain?”といった言葉が些か唐突な感を与えることは否めない。しかし“pride”は、特に晩年のロセッティの作品を読む上で意味深い言葉である。“The White Ship”においては、愚かな王子の「奢り」と、その父親である王が長年をかけて得ることのできた「誇り」の両方を表わし、読者はロセッティ自身の人生観をこの言葉に垣間見る。また彼の心情をより映していると言われるソネットにおいて彼がこの“pride”を用い、若さ故の奢りをよく詠ったことも思い出される。そんな若さ特有の愚かしさと同時にソネットには、その瑞々しい美しさを讃えるものもあった。しかし彼の人生最後のバラッド詩の21スタンザで“pride”は、ヴァン・ハンクス自身によって「風の中で羽根の破れた」哀れな姿で表わされ、さらに「脆く、無意味なもの」と表現されるのである。

息子の願いを退けたヴァン・ハンクスを悪魔は“Gossip, well done!” (st. 23) と祝福する。その悪魔の目は“fell desire” (st. 23) に燃えていたと詠われるが、この“desire”もまたロセッティのソネットによく用いられた言葉であった。若き日のソネットにおいては、しかしそれは恋人に対し抱く渴望、情欲であり、しばしば“heart”や“vain”といった言葉と共に使われた。その“desire”が悪魔的な要素を伴って用いられたものとしては、1871年のバラッド詩“Rose Mary”に1880年付け加えられた“Beryl Songs”において、邪悪なる「ペリルの丘」の精を“desire”の精であると表現したことが挙げられる。²⁰ 24スタンザで息子の妻がやって来る。

“For two months now I have begged my bread;
 Father, I can no more:
 My mother’s deaf and blind in her grave,

²⁰ “We whose home is the Beryl, / Fire-spirits of dread desire” (“Beryl-Song” in “Rose Mary” I, 1-2.)

But her soul is at Heaven's door;
And though we're parted on this side death,
We may meet on the further shore.” (st. 25)

ヴァン・ハンクスの妻は既に亡くなり、その魂は「天国の戸口」にある。息子の妻は彼女と再び出会うことができるだろう。しかしヴァン・ハンクスは“My girl, even choose this road or that, / So we be asunder still!” (st. 26) と答え、その言葉どおり彼が妻や息子の妻の居る天国へ行くことはなかった。そしてこの言葉は一方で、ロセッティのある遺書めいた書簡を、自分の死後、遺体を妻と同じ墓に葬ってくれるなど求めた彼の言葉を我々に思い出させる。

27スタンザから31スタンザにかけて、怪奇趣味的な描写が続く。彼らが吐き出す煙は“snakes of knotted blue” (st. 27) のように彼らの頭の上へのぼり、その真中に“Two fiery eyes” (st. 27) が輝いている。この描写はJean Delvilleの『スチュアート・メリル夫人の肖像』（1892）に代表される新しい画壇の流行、象徴派やデカダン派の絵画にも通じる。ロセッティが自身の芸術が時代の嗜好にそぐわなくなることを非常に恐れていたことは前出の書簡でも明らかである。もはや人々の興味を引くことの困難になったラファエル前派の流れを汲んで生まれた新しい潮流の絵画を、彼は詩作品の中において描いてみせたと言える。

炉の上に7枚の鏡がある。真中に1枚太陽のように光を発し、周りの6枚がその光を反射している。ここに映った像が陰鬱な墓のようであったと描写されるのは、そこに赤ん坊とその両親が飢えのために死んで横たわる姿が写し出されたからである。(st. 29) 言うまでもなく、それはヴァン・ハンクスの息子たちである。しかしそれを見てもヴァン・ハンクスは，“sign of grace” (st. 31) さえ見せない。“The White Ship”において語り手は“He was a Prince of lust and pride; / He showed no grace till the hour he died.” (st. 62) と詠ったが、しかし王子は最期に溺れた妹を救おうと自らの命を投げ出した。ヴァン・ハンクスは、最期の時に“grace”を示した王子に劣るのである。彼に救いの道はなかった。

“The one toward sudden stupor sank, / While the other laughed aloud” (st. 32) と詠われるように、悪魔はかつてヴァン・ハンクスがそうしていたように (st. 2) その横で敗者を嘲るように笑う。ヴァン・ハンクスのすべり落ちる腕を準えた“a weight of lead”が、この場面を我々の感覚に訴えるものになっている。司祭に向かって悪魔は言う。

“Nay, nay”, he said, “Our gossip sits
On contemplation bent;
On son and daughter after, his mind
Is doubtless all intent (st. 38)

ヴァン・ハンクスが最期まで“grace”を示さなかったことを、改めて我々に印象づけるよう

な悪魔の皮肉であるが、また一面曖昧さを残す表現でもある。もはやヴァン・ハンクスの本心を知る由も無く、それを推し測ろうと試みれば、探る術の無いロセッティの真実の心という壁が立ち塞がるかのような困難を覚える。しかしながら神に仕える司祭の前での冒涇の言葉は、ヴァン・ハンクスの愚かさを非難する語り手ロセッティの言葉であり、この悪魔がロセッティのいま一つの姿であったことに我々は気付かされる。“Too late, poor priest” (st. 41) と言葉を残して、悪魔はヴァン・ハンクスを地獄へと連れて行く。

A shrieking wretch hung over his [a dreadful monster's] back
As he sank through nether space.
Or such a rider on such steed
What tongue the flight shall trace? (st. 42)

正体を現わした悪魔はここにきて“dreadful monster”と呼ばれる。この連には、伝承バラッド“The Farmer’s Curst Wife”において悪妻がサタンによって地獄へと連れ去られる場面が連想される。²¹ 伝承バラッドを熟知していたロセッティらしい表現であると言えよう。

They [fiends] have sliced the very crown from his head,
Worse tonsure than a monk’s —
Lopped arms and legs, stuck a red-hot tube
In his wretchedest of trunks;
And when the Devil wants his pipe
They bring him Jan Van Hunks. (st. 44)

これを単に伝承に基づいたバラッド詩と読むならば、ユーモラスな結末とも言える。尤もユーモアあってこそその自己戯画であろう。しかしこの時既に足や腕の自由を失い、しばしば手紙でさえ口述筆記に頼っていた彼が、²² 手足を切り取られたパイプにその姿を準えたとするならば、このなんとも奇妙な、なんとも無気味な、そしてなんとも哀れな姿に成り果てたヴァン・ハンクスがロセッティ自身であるとするならば、この作品を読むことは第三者にとっても辛い作業である。かつて“The Blessed Damozel”において自らの視点をも天上に置き、あれほど美しく天上での恋人たちの再会を願ったロセッティが、いまや地獄に堕ちたのである。しかしヴァン・ハンクスの無様な死は、“The White Ship”において詠われた“the devil’s dues” (st. 28) ,つまり彼の生前の行ないに対する当然の報いであった。“The White Ship”や“The King’s Tragedy”において死は潔く、恥ずべきものではなかった。しかしロセッティ最後のバラッド詩に死の美学は無い。それが、真に死を目前に

²¹ “Now Satan has got the old wife on his back” (278A, st. 5) (from *The English and Scottish Popular Ballads*, vol. V, ed. Francis James Child, New York: Dover Publication, Inc., 1965.)

²² Cf. O. Doughty and J. R. Wahl, *op. cit.*, IV, 1612.

したロセッティの心情を映したバラッド詩であったのである。最後のソネット，“The Question”と題された二つのソネットにおいて彼は、人の一生を“*Youth, Manhood, Age, one triple labouring mine*”²³と表わした。“*Youth*”は“*the Unknown*”を求め、“*Manhood*”は“*knowledge*”に対する欲求のため“*the Truth*”を探し、そして“*Age*”は、その姿は“*haggard and uncouth*”と描写されるのであるが、長い間繰り返されてきた“*question*”に再び心悩ませると語る。スフィンクスの絵に付されたというこのソネットについてロセッティの書簡編集者は、“*Youth*”には若くして亡くなったOliver Mardox Brownが示唆されていると解釈する。²⁴しかし彼が亡くなる4日前に書いたと言われるソネットに込められた思いとはどのようなものであったろうか。次に引用するのは二つ目のソネットの最後の部分である。

Oh ! and what answer? From the sad sea brim
 The eyes o' the Sphinx stare through the midnight spell,
 Unwavering, — man's eternal quest to quell:
 While round the rock-steps of her throne doth swim
 Through the wind-serried wave the moon's faint rim,
 Sole answer from the heaven invisible.

以前彼は自分の人生を振り返り、それは決して常に恵まれたものではなかったと語った。“*Youth*”, “*Manhood*”, “*Age*”を通して何かを求め続け、しかし報われることがなかったのは、作者ロセッティ自身ではなかったか。“*Jan Van Hunks*”に詠われたと同じく、天は彼から遠い。「目に見えない天から差す、微かな月の光」がたった一つ彼が得た答であった。彼が最後のバラッド詩と、そしてスフィンクスの伝説を借りたソネットにおいて描いたものは、「非個性」を特徴とするバラッドの形式やテーマ、また普遍の物語を防波堤とした、作者ロセッティの心であった。つまり作品は伝承を離れ「個性」の結晶となったのである。1882年4月9日、彼は家族と2人の友人ワッツ・ダントンとHall Cainに見守られてこの世を去った。最後に引用するのは、その8日後Swinburne (1837-1909) がスコットに宛てた書簡である。

No one who ever loved the friend who died to me — by his own act and wish — exactly ten years ago can feel. I suppose, otherwise than sorrowfully content that the sufferer who survived the <friend> man we knew and loved should now be at rest. ²⁵

²³ From *Letters of Dante Gabriel Rossetti* IV, 以下, “The Question”からの引用は全てこの版に依る。

²⁴ *Ibid.*, pp. 1952-3.

²⁵ Cecil Y. Lang, ed., *The Swinburne Letters* (New Haven: Yale University Press, 1969), IV, 267.

“The King’s Tragedy”の女王Janeの最後の言葉を想起させる。王Jamesが「真実の詩人であり、人々の友」であったように、ロセッティもまた真実を詠う真の詩人であり、“<friend> man”であるとして、少なくとも友人スウィンバーンの心には残ったのであった。そして読者は、最後に彼がああ「微かな月の光」に救いを見出したのだと信じたいのである。

[本論は、*KASUMIGAOKA REVIEW* (福岡女子大学英文学会) 4 (1997) 掲載の初出論文に加筆訂正を加えたものである。]